コロナ禍のただ中で

新型コロナウイルスのことが話題にのぼり出したのは、昨年の 1月頃のことです。はじめはその正体がよくわからず、クルーズ船で感染者のクラスターが発生したニュースを聞いたあたりから、何だか恐ろしい感染症を引き起こすウイルスが持ちこまれたものだと思いました。

感染したら重症化するリスクをかかえた利用者さんが多いため感染対策を今まで以上に徹底することと、日常生活でも職員、利用者さん、そのご家族皆様にお願いし、外出も控えてもらい極力ウイルスを持ち込まない、そんな思いでこの一年を過ごしてきました。

また、日中活動も十分換気し、パーテーションの設置や屋外活動を取り入れ、密を避ける工夫を致しました。アルコールも医療用のものを購入し、送迎後の車や、施設内の消毒も徹底して行いました。

感染拡大のニュースを聞いて、「これだけ感染が拡大してきたら、いつ陽性者が出てもおかしくない状況やから気をつけんならんね。」と言いつつも、2020年度は、まだニュースの中のでき事でした。ところが、今年度に入り、４月１８日（日）未明、前々日から発熱していた利用者の一人が PCR検査の結果陽性と判明したという連絡を受けてから、ニュースの中の世界が現実のものとして、目の前に立ち現われました。

その方は日中生活介護とグループホームの利用をされている方です。感染したことが分かった方を入院させてほしいと思いましたが、発熱と咳ぐらいでは入院させてもらえませんでした。せめて、他の方と隔離するために、府営住宅のグループホームの一室を空けて、そこに移動したいと思いましたが、保健所からは「移動することはお勧めできません。法人の責任でなさるならどうぞ」と言われ、隔離することもできませんでした。しきりをすると 5人と5人に分かれる形の１０人のグループホームの中で発生したことです。保健所の指導でゾーン分けを実施しましたが、発症二日前から強い感染力を持つコロナウイルスのこと、いくら感染対策に気をつけていても、24時間起居を共にするグループホームで完全に感染を防ぐことはむずかしいです。

はじめ陰性だった人も、数日後に咳症状が出て、発熱し、再検査すると陽性と判明。それが数日間隔で２人、３人増えていきました。最終的には、グループホームの利用者さん 10名 中 8名が感染、支援者側は職員1名と世話人2名が感染しました。

そして、利用者さん 2名が亡くなるという結果になってしまいました。体調が悪化し救急車が来ても「入院先が見つからないので、様子観察しておいてください」の繰り返しで、何度目かにやっと入院できた時には、肺がかなり悪くなっていて助からなかったのです。

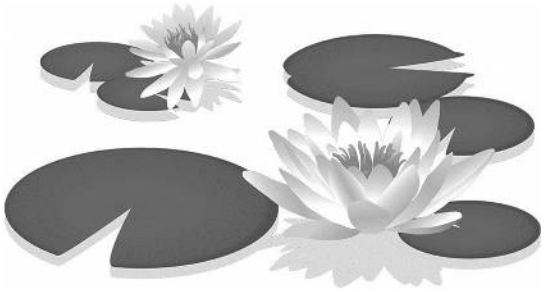
一年前、コロナの問題が起こった時に、国（政府）が本気で国民の生命を守ることに向き合ってくれていたら、そして専門家の意見に耳を傾けて、きちんとした医療体制を整えようとしてくれていたら、こんなひどい医療崩壊はおこらなかったはずです。かえすがえすも悔しい思いでいっぱいです。

二人の利用者の方を亡くしたことで他の利用者の方やそのご家族、職員にも心の傷を残すことになってしまいました。今後はそのことにも向き合っていかねばならないと思っています。

ただ、救いに思うことは、グループホームに入り、陽性者の支援に当たってくれた職員2名と世話人4名が長期間献身的に対応してくれたことです。自身も感染の不安と闘いながら、次々と陽性者が増えていき、状態が悪くなっても救急要請をしても何もしてもらえず、どんどん悪化していく利用者さんを見ていることしかできない現場での勤務は、精神的にも肉体的にもとても苛酷なものだったと思います。

私たちがお願いしたのでしかたなく応じてくれているところもあるかもしれないなあと勝手に思っていたのですが、後で聞いてみると、職員も世話人さんも長年支援してきているので利用者さんのことをわが子のように思い、心配でたまらないという思いですすんで入ってくれていたそうです。その気持ちがありがたく、感謝してもしきれないくらいです。

とりあえず今回大きな犠牲を払ってではありましたが一応終息しましたが、コロナはまだまだ終わっていません。今後に向けても、職員一丸となってがんばっていきたいと思いますので、今後ともご支援よろしくお願いいたします。



社会福祉法人ポポロの会
理事長　樋渡　輝子